

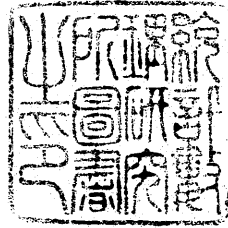
T 02
N 69
23

日本における統計学の発展

第 23 卷

話し手 ハバート・パッシン

聞き手 西 平 重 喜
 清 水 一 郎



1981年1月9日(金)

パッシン東京事務所にて

ま え が き

- 1) この速記録は、昭和55、56、57年度文部省科学研究費総合(A)によるもので、研究者は次の通りである。
江見康一、丘本正、大屋祐雪、坂元慶行*、鈴木雪夫、竹内清、西平重喜*(代表者)、野沢正徳、広田純*、藤本熙、松下嘉米男、松田芳郎*、三瀨信邦*、森博美*、山元周行 (* 推進係)
- 2) インタビューの聞き手としては、研究者以外の方々のご援助を得た。その方々のお名前は、別巻を参照のこと。
- 3) この速記録の原本は、統計数理研究所図書室に登録保管される。そのほか、話し手と聞き手及び関係の協同研究者が保存する。
- 4) この速記録の利用に制限はつけないが、話し手、聞き手、研究代表者または推進係と話し合った後にされるよう希望する。
- 5) 速記録を個人的に研究するため、コピーを希望する方は、代表者がコピーしやすい形で保管しているので、それを利用することができる。

以 上

西平 それじゃ、始めさせていただきます。

統計学の発展のため、昔の話を伺っておきたいということなんですけれども、広い意味での統計学で、パッシンさんは世論調査の初めのころ、いろいろご指導いただいたりしたものですから、そういうことの話をお伺いしたいのです。

まず初めに、パッシンさんのことをよく知っている日本人はたくさんいますけれども、ご出身とかそういうことは、案外みんな知らない。私も知らないんですが、どこのお生まれですか。

パッシン ぼくは、シカゴ生まれのシカゴ育ち。シカゴ大学にも行きました。

シカゴ大学で、ソシオロジーでなくてアンソロポロジーをやりました。ぼくはアンソロポロジストです。1962年、コロンビア大学に行ったときに、初めてソシオロジーの学科に入った。そのときまで、ずっとアンソロポロジーばかりやっていた。アンソロポロジーとソシオロジーはどういうふうに違っているか、ぼくはよくわからないけれども、とにかく大学の専攻はアンソロポロジーだったんです。

西平 失礼ですけれども、お生まれは何年ですか。

パッシン 1916年の12月の16日です。12月の16日はベートーベンの誕生日ですがね。

西平 それじゃ、日本流にいうと、出身の大学はシカゴ大学ということですか。

パッシン そうです。

西平 アンソロポロジーだと、ベネディクトや何かの……。

パッシン 日本に来る前にでもベネディクトを読んだことがあったのですが、実はベネディクトの日本研究は、日本に来てからしか知らなかった。つまり、発表が終戦後だったので。終戦の翌年、昭和21年の初めだと思います。ぼくは、日本に来てからしか見なかったのです。書いたということを知ったんですけれども、ぼくはまだ兵隊だったから、見るチャンスがなかったわけです。

ですから、ぼくの日本研究と申しますとほとんどなかった。あるとしたら、ジョン・エンブリーの研究ぐらいだった。エンブリーはシカゴ大学のアンソロポロジストで、戦前には恐らくアメリカ唯一の、日本のアンソロポロジーの研究家だった。熊本県の須江村というところで実態調査（フィールド・ワーク）をして、有名な本にしたんです。戦前ではそれが唯一の、アメリカでのアンソロポロジーの日本研究だったんです。当時はそのくらいしか知らなかった。

西平 どうして日本に興味をお持ちになったんですか。

パッシン それは全くの偶然だったんですけれども、戦争が始まったときは、日系人がアメリカの西海岸から追い出されたんでしょう。戦争が始まった1941年12月には、ぼくはノースウエスタン大学のアンソロポロジーの講師（インストラクター）をやっていたのです。

戦争になってから、ぼくは初めて世論調査の経験を身につけるようになった。当時、アメリカの農務省の中に農業経済局（Bureau of Agricultural Economics）というところがあって、その中に社会心理学のリカー（Rensis Likert）先生の小さな世論調査機関があったのです。プログラム・サーベイズ・ディヴィジョン（PSD）

といわれた。戦争が始まったころは小さい研究所で、百姓を対象にして、農務省のプログラムをどう受け取るのか、百姓が農務省に対して何を望んでいるとか、プログラムにどうこたえているかというようなことをアンケートをしていたのです。

戦争になったら、政府がなお世論調査を重要視してきた。しかし、アメリカ政府内で世論調査機関みたいなものはそれしかなかった。唯一のものだったし、幸いに学問的に質が非常に高かった。

技術的に2つの面でそうだったといえると思う。1つはリカート先生が有名な社会心理学者だった。プログラム・サーベイズ・ディヴィジョン(PSD)を設立する前でも、もう大分有名だった。つまり、調査方法とか、サンプリングの面でもPSDが一番すぐれた研究所という評判だった。いわゆる層化(ストラティファイド・ランダム・サンプリング)が大規模に実行されていたのは恐らくそこだったでしょう。その2つの点で非常にしっかりしておったんです。

そして戦争になったら、全国じゅうの学者を募集しました。ぼくは当時ノースウエスタン大学にいたが、そこからは社会心理学者が2人呼ばれたのです。その1人が、いま非常に有名なミシガン大学のアングス・キャンベル博士。

西平 彼は、死んだそうですね。

パッシン そう。いつ?

西平 フランスの友達から「アングスが死んだ」って、去年(1980年)のクリスマス・カードに書いてきました。

パッシン そうですか。それは私知らなかった。

西平 いい人でしたけれども、あそこにはいたんですか。

パツシン 彼はノースウエスタン大学でぼくの先輩で心理学、ぼくはアンソロポロジ―だった。彼と、もう一人心理学者の、いまどうなっているか知らないけれどもジョン・エバハートという。この2人がリカートに呼ばれたんです。そしてキャンベルが研究所の第2番目の地位になった。

彼は、アンソロポロジストが2~3人くらい欲しい、来ないかといってきた。それで、1942年の6月、学年が終わってから、ぼくはワシントンに行った。そのとき、アンソロポロジストが2人行ったんですが、1人は、覚えているでしょう、ジョン・ベネット。ぼくはベネットとシカゴ大学の同級で、非常に親しかった。2人でチームだった。それで2人が一緒にワシントンに行っただんです。

そこの調査の特徴は、ただの普通の世論調査じゃなかった。つまり、広くて浅い調査(エクステンシヴー-extensive)でなくて、いわゆるデプス・サーベイだった。だからデプス・サーベイとエクステンシヴ・サーベイの結びつきということになった。エクステンシヴかアンケート調査をやる前に、かなり時間をかけてデプス・サーベイを行うというやり方。

デプス・サーベイの段階で、ぼくとベネットがインタビューをしていたのです。つまり、プリテストとか、問題の背景を調べるときには、私らアンソロポロジストが動いたわけです。そういうことで、アメリカじゅうしょっちゅう旅行しました。たとえば調査する前に、ジョージア州のアーゴスタ市に6週間くらいいて、徹底的に町

の研究をしたり、アンソロポロジストとしての調査をやりましてから、その後で世論調査が行われたのです。一々調査について私らが徹底したバックグラウンド調査あるいは社会心理学調査をしたわけです。

そういう仕事は2年くらいしまして、ぼくとして初めて世論調査の経験を身につけたのです。かなり徹底的なよい経験だった。非常にすぐれた研究所で、たとえばハイマン先生がいたし、つまり当時のアメリカの一流心理学者、社会学者が世論調査に近づいた。たとえばいまの「パブリック・オピニオン・フォータリー」の編集長のディブスンさんとか、ああいう人はほとんどみんなそこに一時に集まった。アメリカ一の研究所だったんですから。ほかには、ギャロップとか、ロパーみたいな調査しかなかったですから。

2年間くらいそこにおりまして、そろそろ徴兵になるんじゃないかと思ってきました。

西平 リカートさんはどういう方なんですか。ぼくは、あの方の書いたものは印象的なんですが、こわい先生ですか、やさしい先生ですか。

パツシン いや、やさしくない。ちょっと几帳面で、非常に礼儀正しく、親しくなれそうな人じゃない。ぼくはそこの本部にあまりいなかったから、よくわからない。ときどきしかおつき合いしなかったのです。

ぼくとベネットは、テキサスとか、カリフォルニアとか、ミシシッピとか、へんぴなところばかり行って、2週間ないし6週間実態調査してからワシントンに帰ってきたもので、あまりつき合いはなかったのですが、印象としては非常に礼儀正しい。

西平 紳士？

パッシン 紳士です。そして頭が非常に速く、すぐ即応するという感じでした。ぼくはあまり用事なかったですから、直接のつき合いは少なかった。

彼よりはキャンベル、そしてもう一人おもしろい人で、フルデマー・ニールセンという人、いまアスペン・インスティテュートの幹部になっている。

西平 調査会社の？

パッシン いやいや、そのニールセンじゃなくて、長くフォード財団に関係していた。国際関係。それから、長くアフリカ・アメリカ・インスティテュートにいた。有名な方で、アメリカの財団についてかなりの権威者です。彼もそこにいたんです。

その2人にしょっちゅう会いました。いま名前、ど忘れしてますが、サンプリングを担当した人は、本当の天才だった。ぼくは彼にできるだけしょっちゅう会いまして、いろいろ教わったんですが、本当に驚いちゃったんですよ。巧みなやり方で、あんなに少数でリッパなサンプリングができるということに、本当に驚いたのです。

とにかく2年間くらいそこにいまして、そろそろ兵隊に行かなければならないじゃないか、徴兵になるだろうと気になった。ぼくは若かったけれども、結婚していて、1942年に子供ができました。そして軍の都合で、子供を持つ者は猶予になったのです。

西平 召集がなかなか来ないわけですね。

パッシン そうなんです。2年間くらい行かなかったけれども、もうそろそろその時間になるんじゃないか、ぼくの番号がいよいよ来るんじゃないかと思った。少し自

分の時間が欲しかったものですから、研究所をやめました。3カ月くらいを私生活に利用するつもりでした。ぼくはその前にメキシコで人類学の研究をやったのですから、きちんと完成したかった。それで、家で遊んだり、幾つかの長い論文を書いたり、大体そういうことにその時間を使ったのです。

ところが不思議なことに、徴兵の予定が狂ってしまっ
て、また延ばされちゃった。非常によかったんだけど
も、お金がなくなった。(笑) お金がなくて、何とかしな
ければならないと思ったけれども、いつ兵隊に行くかわ
からないから、ろくな仕事はできない。それにろくなと
ころは採ってくれない。大学とか研究所とかは、いつ兵
隊に行くかわからないから、ちょっとむずかしかったん
です。

それで、数人の友達に聞いたたりしましたら、日系人の
疎開でアメリカ政府が、ウォール・リロケーション・オ
ーソリティ (WRA) という機関をつくっていたのです。
WRAは西部の収容所を担当し、収容所から日系人が出
てくると、一般社会への受け入れという問題も担当して
いました。出てくる人たちの職業と住宅をあっせんする
仕事をやっていた。ぼくの友達が、WRAでかなり高い
ポストに置かれていたのですが、彼の話によってWRA
はよくアンソロポロジストを採る、日本人はエキゾチック
で、ヨーロッパ系とは違う民族だから、日本人を取り
扱うのに専門家が一番いいんじゃないかという考えだっ
たらしい。ぼくをそこに採り入れてもらったんです。

おそらく収容所に行くだろうと思った。キャンプにか
なり多くの人類学者がいたのです。ぼくの知っている人

が十何人いたんです。そのうち、いま有名になった人類学者もいた。おそらくぼくはそこに行くだろうと思ったら、そうじゃなかった。そのかわりにデトロイトに送られちゃった。デトロイトの支所長になった。収容所からの日系人を受け入れ、仕事や住宅なんかのあっせんをやった。日系人とつき合ったのは、そこが初めてです。

その事務所で、最初役人が2人いた。1人はオハイオ州立大学教授で、2~3カ月間くらいでやめましたので、ぼくは1人になった。あとはセクレタリー-2~3人、みんな2世の若い女の人を入れたんです。

ぼくは人類学者なものですから、当然言葉、語学に非常に興味があって、覚えなかったけれども、なかなか教えてくれない。というのは、日本語ができるということは、2世としては非常に不利だったんです。つまり、日本語がよくできる人は、純粹のアメリカ人じゃない、日本的だというふうに見られる。だから、ぼくの周りの2世は、わざわざ「日本語はできない」とばかりいつていたんです。ぼくは、その気持ち、わかったんだけど、とにかく日本語を勉強できないんでイライラしていた。

ちょうどそのころデトロイトの道端で、シカゴ大学の同級生にぶつかった。彼はいま非常に有名な考古学者ですが、当時軍服を着ている。彼と落ち合って飲みに行った。そして、どうしているかと聞かれたら、こういうところにいる、日本語をとてもし勉強したいけれどもできないと語った。そうしたら、全くの偶然ですが、彼は陸軍日本語学校の副校長だったんです。そして、君はどうせ陸軍に行かなければならないけれども、志願すれば陸軍日本語学校に入れる、志願しないと入れてくれないから、

早く思い切って志願しろと彼がいったんです。そういっ
た偶然で、ぼくは陸軍を志願して、その日本語学校に入
れてもらったんです。

西平 大体どのくらい日本語を……。

パッシン そのコースは18カ月だったんです。つまり
1年間、ミシガン大学で勉強して、2カ月間、軍事教練
を南部でやった。予定としては、それが終わったら半年、
ミネソタ州のある基地で完成する。ところが、途中で戦
争が終わりましたから、実際は16カ月間になったんです。

そして、卒業してすぐ日本に来たんです。つまり、終
戦の年、昭和20年の12月の終わりごろです。学校にいる
ときは伍長くらいだったんですが、卒業したら少尉にな
った。

あなたと会ったときは、ぼくはおそらくまだ少尉だっ
たでしょう。

西平 ぼくがお目にかかったのは24年くらいです。

パッシン それじゃ、もう復員した後ですね。

西平 ぼくは、パッシンさんの軍服姿は知らないです。

パッシン 日本に着いたころは、ぼくは少尉で、最初博
多に行ったんです。博多でテレコミュニケーション検閲。
そこに4カ月ぐらいいて、5月から6月に東京に呼ばれた
んです。世論調査の経験があることがわかってきて、総
司令部がぼくに「来い」と呼びかけた。それで東京に行
ったら、民間情報教育局（CIE）だった。その仕事
は主に教育とメディア関係だったけれども、ぼくはその
関係じゃなくて、世論調査で呼ばれたんです。

そのとき、ハーバード大学のジョン・ペルゼルが世論

調査を担当していたんです。彼は、海兵隊の少佐か中佐、
当時は少佐だったと思いますが、彼もアンスロポロジス
トだった。ただ、世論調査は全然経験がないから、なる
たけぼくに任せようとした。彼は2〜3カ月くらいいて、
アメリカに行って復員してから、またハーバード大学に
帰って、博士コースに入った。終わってからまた日本に
戻ってきた。その経緯でぼくは、思いがけなく少尉の低
い位で、世論調査の担当者になりました。

当時は、パブリック・オピニオン・ユニットというこ
とで、課とか部でなくて班くらいの組織だった。専門家
はぼく一人だった。そして、使命がはっきりしていなか
った。ただ世論について何かやらなければならない。

一番最初、日本人から毎日、マッカーサー元帥あてに
何千通もの手紙やら請願が来た。それを分析して報告書
を出さなければならなかった。

西平 投書ですか。

パッション そうです。最初は、その投書の一部は総司令
部の情報局(G2)、ゼネラル・ウィロビー少将のところ
に行ったんです。どういう基準で、G2とぼくのところで
分けていたか知らないけれども。ただ、うちの方で受
けた分を分析しなければならぬ。毎日何千通も入って
きまして、読み切れないうし、どうしようかと思った。(笑)
そしてだんだんと合理的なやり方ができました。

ぼくは、これが世論調査じゃないから、こっちの仕事
じゃなくて、情報局に任せるべきだと思った。上司を説
得して結局そうになりました。

投書分析でなければ、どういう仕事をやればよいかと
なると、ぼくはやっぱり世論調査(当時は輿論だったが)。

世論を測定することだと思った。実現するにはどうやればいいのか。カネがかかるから、わが班の予算ではとてもできないし、委託する予算もなかった。それなら2つの方法しかない。1つは、世論の兆しを、メディアとか簡単に手に入りやすいものを読み取って分析すること。もう1つは、日本の世論調査機関と協力すること。そこで、既存している研究所と一緒にするか、新しい研究所をすすめるかということでした。既存か、新しくできた世論研究所の養成がぼくのミッションになった。

その後、世論調査ばかりではおもしろくないと思ったから、社会学的、もっと広くいえば、社会科学的な研究はわが班のミッションに追加してもらった。

西平 PO & SR。

パッシン それが世(輿)論及び社会学研究部になったんです。そこで農地改革とか漁業改革とか、占領軍のあらゆるプログラムに関する前と後の社会学的調査、世論調査をやることになった。そういうことだったんです。

最初ぼくはアメリカ人として1人だったから、それにちょっと野心的だったから、だんだんと人数をふやしていきました。技術的な面においてアメリカ人の方がいいと思っただが、日本語ができなくて、日本のことほとんど知らないから、アメリカ人を使うには限度があると思っただ。世論調査の達者なアメリカ人を数人入れて、残りは日本人の学者で付加した方がいいと思っただ。

ですから、そのときによって数が違っていたけれども、スタッフというよりは、顧問とかいろいろな形で日本人が50~60人、多いときには60人くらいだった。社会学者、人類学者、統計学者などが、何らかの形で関係していた

と思います。

西平 田村町のもとのNHKの1階の大きな部屋に、有名な社会学の先生がずらりと……。私はあそこで1年間給料をもらいました。もらいに行くだけだったんですけども、行くと老先生たちがいらっしゃるので、びっくりしました。

パッシン 終戦のときだったから、台北とか京城大学から帰ってきた学者たちで、職がなくて困っていた者を中心に心配して、PO&SRに一時入れたんです。一番最初、渋沢敬三さんに、「こういう人がいるが、何とかできないか」と頼まれたんで、その推薦ですいぶん入れたんです。台北帝国大学の馬淵先生とか、京城帝大の鈴木栄太郎先生とか。

西平 教育大学にいて、宗教学をやっていた。

パッシン 吉野清人、桜田勝徳、漁村社会学とか民俗学とか、すいぶんいろいろな人を入れた。柳田国男先生のお弟子で、困っていた人も入れた。もちろん、そんな多くて使い切れなかった。われわれのプロジェクトに参加していないときに、皆自分のやりたいことをやらしたのです。

アメリカ人は少なかったけれども、みんないい人でしたよ。1人はジョン・ベネットだった。いまミズーリー州のワシントン大学の人類学教授をしている。もう1人は、ミシガン州立大学の人類学の石野巖君、彼は2世です。それから、後にコロンビア大学の博士になった、デビッド・シールズ。彼は、「国際社会科学事典」の編集長をしていて、そしていま社会科学評議会(SSRC)の重役をしている。

西平 デミング？

パッシン デミングは顧問として3カ月間くらいいらした。わが部の顧問じゃなくて、いわゆるESS（経済及び科学局）の顧問としてだった。大ぜいの人に顧問としていらしていただきました。

スタッフとしては、ハワイの2世の女の人、ツチヤマ・タミエという人。もう1人は、サム・ナカガマという当時2等兵だった2世がいた。いま非常に有名な、経済学研究所長をしている人。かなり世論調査でさばけた者で、ジェイムズ・セーヤー君。とにかくアメリカ人のスタッフは若くて少ないので、日本側のスタッフで偉い先生、そして、それにときどきアメリカから顧問に来てもらったんです。

顧問のうちには、かなりいい人が来しました。ハバート・ハイマンが来ましたし、ハーバード大学のクライド・クラックホーン、そして社会学のレイモンド・バウアーも来ました。当時、いわゆるシンク・タンクというものがほとんどなかったのが、彼の研究所（名前を忘れましたが）が、おそらくアメリカの最初の1つだったと思います。ロチェスター大学の社会学主任教授をやめて、例のシンク・タンクの最初の所長になっていた。彼もリカーターの研究所（PSD）に関係があった。だから、世論調査方法は全般についてその連中が詳しかった。

もう1人の顧問で、精神分析学者がいた。コロンビア大学の有名な人類学者フロレンス・パウダナカーの妹、ホルテンスだった。それから、農村社会学で有名なアーサー・ルーパーという人も来てもらった。彼は、われわれの農地改革の研究を担当していました。

そういうぐあいに、しよっちゅうアメリカの専門家に
来てもらいました。そして、専門家が来たときには、講
習会みたいなことをやりました。——覚えているかもし
れないが、総理官邸で世論調査の研修会があった。そこ
でサンプリングについてデミング、一般世論調査方法は
ハイマンがやりました。(写真を持ってくる)

西平 私は、総理官邸の会合は話だけで、全然知らない
んです。

パッシン 佐藤栄作が官房長官していたころで、彼が全
部あっせんしていたんですから。

(写真を見ながら) これが鶴見和子、ハイマン、ぼく、
これがデミング、それから松宮克巳。これは覚えている
でしょう、慶応大学の米山桂三さん。

西平 この間七くなられましたね。

パッシン これはCIEの人々。これは鈴木栄太郎先生。

とにかくる日か4日、総理官邸でやりました。デミン
グ先生はぼくのところ直接じゃなくて、ESSの顧問で
した。とにかく基礎サンプリングの指導で彼を呼びまし
た。もう1人は、ウィリアム・カーブ。

西平 私は知らない。

パッシン 彼も国勢調査局のサンプリングの専門家だっ
たんです。そして彼が、サンプリングの講習会を何回も
やったんです。彼は日本に1年間くらいいました。西平
さんもよく知っているはず。

そういうぐあいにやりましたが、アメリカ側のスタッ
フは少ないし、若かった。非常にすぐれておった人だけ
れども、あまり権威がなかった。日本側は有名な先生が
そろっていたり、アメリカの専門家にもしよっちゅう来

てもらったりしました。

西平 「読み書き能力調査」のときは、パッシンさんは？
 パッシン ぼくはいたんだけど、それは別個に行われた。ペルゼルさんがやった。ペルゼルさんは、最初、自分の博士論文にしようという考えだったと思う。でも、博士論文にはしなかった。とにかく彼が日本に帰りたくて、何かプロジェクトがなければ日本に来られないから、「読み書き能力調査」を引き受けた。

西平 ペルゼルさんがいらっしゃって、復員して帰国されて、また日本に戻ってこられたときの仕事ですか。

パッシン そのとおりです。彼は、戦争が始まったころは、博士コースの最後のところだったんですからね。ぼくがCIEに入ってきて2カ月くらいたってから、彼がアメリカに帰って博士コースをちゃんとやろうとしていました。あのときまだ完成してなかったのです。博士論文しか残らなかった。それで、「読み書き能力調査」を博士論文にしようかと思っただけで、しまいにはやらなかった。違う研究をその論文の基礎にしました。東京大学の尾高邦雄先生と、川崎で鋳物の……。

西平 川口？

パッシン 川崎です。

西平 日本鋼管の？

パッシン そうだと思う。そのプロジェクトの一部を自分の博士論文に使いました。とにかく「読み書き能力調査」は、博士論文とは別個にやったんです。

西平 パッシンさん前からいらっしゃるのに、どうして「読み書き能力調査」には関係があまりなかったのか。

パッシン 彼のプロジェクトと考えると、邪魔したくなかった。そのプロジェクトがなかったら、彼は日本に来れなかったから。何年かちょっと覚えていないけれども、まだ戦後の早いころでしたね。

西平 23年くらいに調査したんですね。

パッシン 23年でしょうね。

西平 私が、24年の秋から集計している段階で、アルバイトでやりました。

パッシン 名目ではわれわれのプロジェクトだったけれども、全部彼に任せました。

西平 さっきのサンプリングの専門家はホロビッツですか、ハンセン……？

パッシン ハンセン。そうです。本当に天才だったですね、おもしろくて。

そして、もう一つ参考になることは、ぼくは直接関係しなかったからうわさだけですが、終戦になって間もなく、10月から、いわゆるストラテジック・ボミング・サーベイ（戦略爆撃調査）というのがあったでしょう。そこで経済、軍事、都市問題、交通とかいろいろな分野があったんです。その中に、いわゆるモラルというのもあった。モラルはやはり社会心理学者がやって、そしてほとんどリカートさん関係でした。ぼくは、まだ陸軍学校終わってないから加わらなかった。ハイマンさんとか、そういう学者連中が大ぜいいいたんですね。心理学者が多かったし、人類学者、世論調査をやる人もいた。リカート先生の研究所が中心になっていたんですから、みんなそこでやりました。

ぼくが顧問を呼んだのは、そのグループの、経験のあ

った人からだったのです。その報告書はごらんになりましたか？

西平 いえ。

パッシン ちょっとおもしろい。どこかに持っていると思う。探せばすぐ出るだろう。かなり大きい報告書です。爆撃中の日本のモラルについてだった。ハイマンさんが担当していたと思うが、とにかく歴史的に非常におもしろいと思います。残念ながら、ぼくはまだ日本語学校終わらなかつたから、加わらなかつたのです。

西平 C I Eにおける世論調査で、パッシンさんの前任に当たる方は……。

パッシン ペルゼルさん。

ただ、ぼくの前に、投書分析以外には何もなかつたのですが。

C I E (民間情報教育局)の最初の局長は、ダイクというラジオ関係、NBCかどこかの副社長だった。当時は軍服で、少将だったんです。そして、彼は世論調査に非常に興味があつたけれども、何もしなかつた。原則としてやりたかつたけれども、実際はやらなかつた。

彼は、何かいきさつというか、政治的な摩擦があつたらしくて、早いころアメリカに帰りました。その後任として海兵隊の中佐、ニュージエントさんが入りました。

彼の資格は、戦争の前、和歌山県で宣教師関係のどこかの中学校で英語を教えたらしい。ダイク少将が帰つたから、ニュージエントはC I Eの局長になった。海兵隊でしたから、ペルゼルと親しくて、世論調査を頼んだのですが、ペルゼルさんは世論調査の経験が全然なくて、

ただ名目だけだった。それでぼくが呼び出されたと思う。

だけれども、ダイクさんが最初からやりたかった。そのころG2（軍の情報部）との摩擦があったんです。世論はどこの管轄か、軍の情報部か、あるいはSCAPか、つまり民間の方が、大分もんでいたんですけれども、ぼくに非常に不利だったのは、ただの少尉だった、そういうこと。尉官と将官と交渉するにはちょっとむずかしかった。

そして、うんとむずかしくなったときは、アメリカの顧問に来てもらったんです。ハイマンさんが、まだ若かったけれども、当時はシカゴ大学のNORCだった。コロンビアに行く前に、世論調査でかなり評判だった。彼がG2の世論分析を徹底的に批判した。方法論の立場からいって絶対ダメだといっていました。その分析は、大分ぼくの助けになった。

それから、ハーバード大学のクラックホーンも来ました。クラックホーンは、当時学者としてばかりでなくて、社会的にもかなり権威のある人だった。彼がマッカーサーに話をしたんですが、世論は軍の項目じゃない、民間のことだと主張しました。軍がやると、だれも信用しない。日本人に対して非常に悪い前例を与えるから絶対にいけないというふうなことをいった。大変助かったのです。

もう一人は、女の精神分析学者だったフローレンス・パウダナカーで、アメリカで社会的に非常に有名だった。彼女は大物の知り合いが多く、非常にうまく牛耳ったものでした。ただの少尉だったぼくには大変助けになった。ぼくがウィロビー中將に会うときには、いつも敬礼して

やらなければならなかった。(笑) いつも立って話をしていたんで、非常に苦しかった。だから、その3人が滞在したときには媒介してくださって、非常に助けになった。

それで結局、世論調査は軍じゃなくて民間の所管になった。軍も、投書とかあるいはスパイの情報によって世論の分析していたかもしれないけれども、本当の世論調査にはタッチしないという原則だった。大変苦しい戦いだったけれども、とにかくその3人の援助で無事に過ぎて、その原則を確立しました。

クラックホーンが来たときに、大変なことがあったんです。覚えているかもしれないけれども、われわれの発表物は特殊な表紙があった。大してりっぱなものではなかったけれども、われわれ用の表紙があった。その表紙を見たら、「世論及び社会学研究部」のものだと、すぐわかったのです。世論を象徴するような写真のモンタージュだった。ところが、G2が同じ表紙を採用した。全く同じもの。盗作だ。とにかく大変な事件になった。究極にそれをやめてもらった。

そのころ、ぼくは復員して民間人になりました。民間人になったら少将の待遇になった。対等に話し合いができるようになったので、その後は大丈夫だったが、そのときまで少尉で本当に苦しかった。

とにかく、PO&SRは自分の研究予算がなかったんで、PO&SRとしての世論調査研究所をつくることができなかつた。そのかわり、日本の世論調査を進めること、そして現存の調査機関と協力することになりました。指導しながらその資料を使うという形でやったんです。

社会学的な分野では、われわれが自分の研究をやった

人です。たとえば農地改革に関して20何カ村、全国調査をやりました。農地改革前と、農地改革を実行してから1年半か2年ぐらいたってから、また同じところで調査をやりました。同じぐあいに漁業権の研究もやりました。そういう研究はわれわれ自分の力でやりました。だけれども、世論調査そのものは自分の力でできなかった。

西平 農地の話が出ましたが、ドーアさんなんかとは、そのとき関係は……。

パッシン なかった。彼が農地改革終わってからしかその研究をやらなかった。われわれのはそれ以前だった。22年の初めごろ。山梨県の桐原という農村で始めた。

そこでプリテストをしました。どうしてプリテストに使ったかというと、喜多野精一先生が戦争前から研究地に使っていらしたから、大分資料があったからです。本テストじゃなくてプリテストにしたのです。その後20何カ村で調査をやりました。

研究チームは、大体10人ないし15人くらいでつくったんですが、そのチームには経済学者、統計学者、調査専門家、農村社会学者などが入っていました。おのおのの村に1~2週間くらいいました。もちろんそこに行く前にも、ちゃんと下準備の資料を集めたのです。農地改革前の調査を22年に踏み出したんですが。

当時の総司令部で農地改革を担当していたのは天然資源局（ナチュラル・リソース・セクション）で、局長は軍服だったんですが、スタンフォード大学の地政学教授でした。そこは学問的雰囲気がかかなりあったんです。NRCが一番われわれを後援した。客観的な社会科学調査が必要だと思ったところは、総司令部内ではNRSが

一番よかった。経済及科学局（ESS）では経済学調査をやりましたけれども、社会調査にあまり興味がなかった。天然資源局ではそういう興味がありました。だから、後援ばかりじゃなくて、そこから大分参加もあった。

そして、第1回の調査を分析したら、NRSと大分いろいろ話し合いがあったんです。プログラムはどんなぐあいになっているか、どういうふうに調整しなければいけないとか、どういうところは注意しなければいけないというようなことで、かなり有益だった。それが、われわれが一番影響を与えたプログラムだった。ほかのプログラムはまあまあという程度でしたけれども、農地改革にはかなり影響を与えた。

そして改革が終わったら、また同じ農村に行って、どういうふうに変わってきたか、村役場とか、村会議員とか、農業組合とか、土地の分配とか、あらゆる社会的なり、心理的なり、精神的な点を再調査しました。そして調査の結果を発表しました。それは1つの例ですが、漁村についても同じようなことをやりました。

当時、いわゆる漁村社会学で、おそらく日本一の2人がうちにいた。1人は桜田勝徳で、当時、主に民俗学をやっていた。漁村のことが非常に詳しくあったもう1人は、関敬吾でした。ああいう学者がいたから、おもしろい調査ができたわけです。

世論調査は自分の力でやらないことになったので、それよりもっと広い調査に力を入れてやりました。そういうやり方でした。

西平 一度何か人口問題の調査をやるというって、水野坦

さんに「サンプリングしろ」といわれてやったのですが、ダメになったことがありましたね。

パッシン そのとき初めてわれわれ世論調査をやる許可をもらって、自分の力で調査をやることになったんです。インタビューアーも全国から動員していいという許可が出たんです。だけれども、途中でダメになっちゃった。

ということは、そこで産児制限問題にぶつかったのです。当時、シカゴ大学の地理学者、エドワード・アッカマン教授という人が、総司令部の顧問として一年くらい来ていた。直接マッカーサーの顧問としていたと思うが、もしかしてNRSの顧問かもしれない。彼が日本の資源と人口についての調査をやって、本の形で出しました。

その本の巻末というか、結論のところ、産児制限にどうしても進まなければならないという個人的な意見を入れたんです。それが発表になって間もなく、マッカーサーのスタッフの人がそれを読んで、しゃくにさわった。アメリカの占領軍が産児制限を進めるなんということはけしからぬと。それで、その本全部すぐ取り戻されたんです。もちろん何冊かはもれてしまったんですが、ほとんど回収しました。

われわれの調査は、ちょうどその事件にひっかかったのです。人口問題は非常にデリケートになってきまして、総司令部が人口問題に触れないことになったんです。それでわれわれが途中でダメになった。

100人くらいのインタビューアーが全国から集まってきた。年末だったんです。ぼくの家でパーティーをやりました。皆遅くまで飲んだり酔っ払ったりしまして、ぼくはどうしようかと思った。(笑) 東京から帰さなけれ

ばならなかったでしょう。帰すといってもお金が要る。だけど、軍は非常にの人気だった。ですから、お金の用意まだしていなかった。帰す汽車賃もなかったですからね。

とにかく大変苦しかった。PO & SRがあれにひっかかってしまった。人口問題、絶対触れてはいけないということになったんですから。それは唯一の、自身としての世論調査だったが、とうていダメになった。

西平 あのとき一生懸命サンプリングをして、それが結局……。

パッシン サンプリングの訓練もやりました。地方でインタビュアーの訓練会までやりましたし、研修会もやって、ずいぶん徹底した準備をしていたのに、そういうふうになってしまったものだった。

西平 あのころパッシンさんがおっしゃってましたね、「日本は停電が多いから人口がふえるんだ」って。(笑) このごろイランか何かのそういう記事が出ていましたけれどもね。(笑)

パッシン そうですね。ぼくは産児制限の調査をやろうとしなかったけれども、人口問題だけでも十分にデリケートだったから、手を焼いちゃったわけです。

パッシン 売春法の時も、いろいろおもしろい研究をやりました。別に問題がなかった。おそらく総理府と一緒にやったと思う。総理府について、また非常に大きな問題が出ていた。総理府が重要な世論調査だった。ところがCIEのニュージェント中佐が、日本政府は必ず世論調査を悪用するという考えだったから、「悪用できない

ような体制をつくらないとやらせない」といった。

ぼくにはそれがちょっと行き過ぎだと思った。アメリカ政府でも世論調査をやるのに、どうして日本政府ができないか。ですから、政府として、やっていいことと悪いことをどういうふうに区別するかということについて、ぼくはいろんなガイドラインを書いた。

つまり、直接政治についてやるのがよくないと、ぼくは思った。人の意見を悪用できるような調査は絶対いけない。プライバシーを保障しなければいけない。ですから、戦争前の思想統制に近いようなものならいけない。けれども、政府のプログラムを改善するための調査は絶対に必要だったから、大分もんでいたんです。

とにかくガイダンスをつくったんですけれども、ニュージエント中佐が「絶対信頼できない」という立場でした。「法律がなければならぬ」彼に任したら憲法の中に入れたかもしれないけれども、(笑)とにかく法律がなければやらせないというのだった。それに大分時間がかかった。

西平 国立世論調査所ですね。

パッシン それを設立するのにずいぶん時間がかかった。ぼくは間に立った。ニュージエントとあまり意見が合わなかった。どっちかというと日本側に近かったから、ちょっとむずかしかった。とにかくやっとその法律ができるようになった。

西平 国立世論調査所をつくるときは、議員の提案でつくったわけですね。そのときの代表者が、大石ヨシエという女の代議士の名前になっているんです。——あの人、酔っ払って暴れたくじゃなかつたですか。

もちろん酔ったのは一回だけで、有名になった人ですけれども、どうして彼女がそういうことに興味を持っていたのか。中で、だれかの名前を借りようということになったのかもしれないけれども。

パッシン われわれは直接には議員とつき合いしないことになった。総理府でもなかった。当時中央連絡事務所という機関があったでしょう。そこを通じてやることだった。

西平 リエゾン・オフィス。

パッシン ときどきリエゾン・オフィスの人が総理府の人をつれてきて話し合いをしていたんですけども、われわれが当事者との直接の連絡は許されなかった。

特にぼくの場合、ニュージエントとしょっちゅう意見が合わなかったから、慎重にやらなければならなかった。意見が違っているということを彼がちゃんと知っていたから、ぼくは非常に注意してやった。

当時、世論調査界がしっかりしていなかった。インチキな調査機関があちこちにあった。特に地方にあった。ゴロツキ新聞みたいなのもあった。そういうところを調べる責任もあった。たとえば軍政部から依頼が来て、「これ、ちょっと評定してほしい」といわれたとき、PO&SRがすぐ調べて報告書を出して、その処理を向こうに任じた。そういう仕事もあつたんです。

西平 それこそ本当に文字どおりおかげさまで。日本では世論調査のスタートがおくれたから、戦争前はほとんどなかったとっていいくらいですね。いい時期に、後からスタートしたし、サンプリングなんか実にきちんと

としたもので、おそらくアメリカよりいいとぼくたちはいうんです。配給台帳や何かもありましたし、そういう点でも恵まれていたから……。

パッシン そうですね。そういう施設が非常に助かったでしょうね。だけど、P O & S Rばかりでなくて、ESSもかなりサンプリングを強調してますから。

いっだったか、インドのカルカッタの研究所から、だれだったか日本に来ました。ストラティファイド・ランダム・サンプリングの理論ですぐれているとの評判だった。おそらくESSの招待で来たと思う。占領中だったから、みずからで来るわけはなかった。招待でなければ来られなかったでしょう。そして、彼を囲んで研修会をやったんです。

もう一人、おもしろい人がいた。——ウィリアム・コップ、デミングの1年間後くらいに来ました。ちょっと変わった人でしたが、天才だった。おもしろかったね。彼は高等学校を中退して、独学で数学を勉強したんです。最初国政調査局にただのクラークで入ったんだけど、大変な天才的才能があったらしい。当時の局長がそれを認めて、例のないことだったけれども、低いクラークからプロフェッショナルの位に昇進した、非常におもしろい人だった。

彼はサンプリングの専門家だった。全国じゅう研修会をやりまして、ずいぶん熱心だった。あるとき、ぼくの家にも2カ月くらい泊まっていた。例の人口問題調査のとき、彼がサンプリングの研修会をやった。

西平 何年まであそこいらしたわけですか。

パッシン ぼくは1951年の12月、ちょっと休憩でアメリカ

かに帰った。女房が結核にかかって、アメリカで入院しましたので、しばらく彼女のそばにいた方がいいと思ったから、12月にやめまして、カリフォルニアのバークレー大学の助教授になった。ですから、51年12月までです。

翌年の4月、占領が終わった。その6月にぼくは自分の研究で日本に戻った。ですから、ほとんど終わりまでいたんです。

西平 いま日本の世論調査とアメリカの世論調査を比べて、どうお考えですか。

パッシン 日本の調査は非常に多いですね。アメリカの世論調査ほど深くはないと思うのです。まだちょっと浅い面がある。技術的には非常にいいと思うのです。けれども、あまり深度がない。同じようなことをやっているところが多いし、おたくの研究所のように、本当に深く突っ込んでやっているところはあまりない。アメリカではかなりあります。

西平 たくさんありますね。

パッシン その点では、アメリカの方がまだずっと進んでいると思います。日本は非常に幅が広くて敏感ですが、浅薄のが多い。ちょっと納得しないところがある。概念上、コンセプションというか、理論がちょっと足りないところがある。何のためにやっているか、何の仮説によってやっているかということがはっきりしていないものが多い。むしろ、アメリカの世論調査みんな完璧なものじゃないけれども、きちんとやっているのがかなり多いと思いますね。大体そんなものじゃないかと思うのです。

西平 ぼくもそう思うんですね。ぼくたちは統計学者だ

から、余り仮説はなかったけれども、たとえば社会学者と協力してやっても、何もなくて、ただ聞くだけ……。パッシン それが多過ぎると思う。

西平 残念ですね。

パッシン セっかくのチャンスだから、もうちょっと完全なものをやればいいんじゃないか。

西平 調査の数は非常に多いと思うのですけれども。

パッシン 総理府でも、相当お金を使って調査しても、ちょっと突っ込みが足りないんですね。量が多過ぎて、質がちょっと足りないんですね。コマーシャルのところはともかくとして、あるいは新聞なんか、記事になるものでなければ使えないから、ときどきしかできないということはあるけれども、総理府はもっと徹底したものをやるべきじゃないかと思いますね。チャンスでもあるし、大きいお金を使っているし。完全なものとはできないかもしれないけれども。

西平 一つは、さっきおっしゃったみたいに、農村調査のときにしろ何にしろ、いろいろプリテストをやったり、アメリカでも、ご自分で農村に入っていろいろ調査をなさった。ぼくたちも、そういうことを自分たちでやったけれども、このごろの人はもう自分は全然フィールド・サーベイはやらない。それは日本だけですか、アメリカにもそういう傾向はありますか。

パッシン アメリカのギャロップとかロパーとか、そういう大きいコマーシャルな世論調査所はそういうふうになっている。けれども、ミシガン大学のISRとかああいうところは、もっと突っ込んだものをねらっているのです。

もちろん、突っ込んだものをやるには、ずいぶんお金がかかるといえますから、お金のせいでできない場合が多いでしょう。それでも、全体としてアメリカの方が日本より突っ込んだ研究をやっていますね。

ヨーロッパはまちまちですから、よくやるところもあるし、案外あっさりしているところもある。アメリカは、全部じゃないけれども、わりといいです。

日本では、せいぜい総理府がもうちょっと深い調査をやればいいと思う。おたくもよくやっていますね。もちろん新聞社でもいいのがありますけれども、全体としてはほとんど浅いものばかり。資料は十分にしぼらないで、いいところだけ使って記事にして発表する。むだが多い。後は資料を公開しないから、そこも問題がある。日本では本当のセオリーによって調査を工作するという事は、わりと少ないですね。

もちろん、選挙調査では目的がはっきりしているけれども、いわゆる社会意識調査とか社会調査の多くは、目的をはっきりしていない。資料はおもしろいけれども、どういうふうに扱うかということがわからないから、評価が非常にむずかしい。

西平 私は去年、まだ数カ月前ですけども、イギリスのMORI (Market and Opinion Research International) というところの人で、各国の世論調査の実情を1冊の本にするから日本のことを書けといわれて、書いて出したんです。間もなく本になったら1部差し上げますけれども、その中で、日本人と日本語と、2つの問題がほかの外国人にわからないだろう。世論調査というのは、日本は非常に盛んですね。だけれども、自分の意

見はあまりいいたがらない国民だと思ふのです。そういう意味では、世論調査をするのは非常に困難だ。ところが、世論調査に対する興味は猛烈に強いと思ふのです。それこそ、たとえば本音とたてまえというような問題なんかも起きてくるし、そういう点で日本人は世論調査に向かないのじゃないか。

もう一つ、言葉も、たとえば英語であれば、質問すれば「イエス、何か」「ノー、何か」と答えると、調査員は「イエス」か「ノー」にマルをつければいい。一番簡単な調査ですね。

ところが、日本語ではそれを訳して「はい」「いいえ」と書いてあるけれども、会話の中で「はい」とか「いいえ」なんて、いったことないわけですね。そういう点で非常におずかしいような気がするんですけれども。

パッシン 日本で質問を「はい」と「いいえ」というふうにたてること自体が間違いです。日本の世論調査について、そのことを認めるけれども、アメリカの調査にも似ているようなことがある。日本ではそのことを甘く見ていると思ふんです。似ているようなものはいっぱいある。世論調査で黑白をつけることによって、かなり間違いが出てくると思ふんですかね。形として、日本のとアメリカのとちょっと違うかもしれないけれども、根本的に似ているような問題があると思ふ。

ぼくの「イエスカノーか」というエッセイをごらんになりましたか。

西平 いただきました。

パッシン そこで書いたのは、英語でも「はい」か「いいえ」かそうはっきりしていないということです。みんな

なはっきりしていると思ってしまうけれども、必ずしもそうじゃない。英語でもあいまいな場合がある。

西平 このごろよく「Yes, but……」というのがある。

パッシン 「イエス」といったら、「それは、賛成必ずしもしないけれども聞いている」という場合が非常に多いし、否定であらわす場合もありますから、そこは非常にむずかしいと思います。

その点で、日本の多くの調査は下手なものがかかなりある。簡単な質問でも下手なものが多い。質問を読んだら、これはダメだって、すぐわかる。

西平 それを日本語の問題として、もっと改良できる、うまくできるはずだと思いにになりますか。

パッシン できると思います。ただ書きなぐるんじゃないくて、もうちょっと工夫すればできる。もう少しフリテストをやるとか、あるいは後の分析をじっくりやればよくなると思います。

この間朝日新聞が、アメリカと日本で両国同時調査をやりました。もうちょっと詳しく見たいと思った。納得できないことがありますね。

西平 「読売」も毎年「日米比較」というのをやっていますね。

パッシン アメリカはだれがやっているんですか。

西平 「読売」はギャロップです。結果のアメリカでのコピーライトはギャロップが持っているのですが、どうもギャロップの方でも困るらしいです。たとえば、「日本人」といったときに何を思い出すか。去年、おとしならいいかもしれませんけれども、10年くらい前にそういても、日本のことはほとんど知らなかったわけでしょう。

向こうも困ったらしいけれども、質問をもう少し考えればいいと思うんですがね。

パッシン 1977年の「世界青年意識調査」では、かなりひどいことがあったね。日本語でもあいまいだし、それに当たりそうな外国の質問を見たら、意味がまるで違うのもあったし、ちょっとひどい。

西平 さっき質問した、言葉として、日本語というのは改良の余地があるかが1つの問題です。もう1つは、日本人ははっきり物をいわないとかなんとかいわれていきますけれども……。

パッシン しかし、それは物にもよりますから。

西平 そんなことはないですか、世論調査で。

パッシン ある程度あるかもしれない。つまり、アメリカ人も、話したくないとか遠慮することがたまにはある。あるいは、デリケートな分野に触れると、信頼できない返事が多いこともある。ですから、分野にもよります。

そうすると、日本人があいまいなとか遠慮するところは、アメリカ人が遠慮するところと、ちょっとかみ合わないかもしれないけれども、両方にあることは間違いないと思う。

たとえば、アメリカ人にセックスについて真っ先に聞くと、絶対に信頼できない。片方では遠慮する、片方では虚勢を張る。全然わからないです。

西平 進歩的なようなことをいってみせるとか……。

パッシン そうそう。ですから、ちょっとわからない。

アメリカでも、たとえば選挙調査が選挙結果と合わない場合が非常に多い。日本と似ているところがあると思うんですが。ただ、遠慮する問題がアメリカ人と日本人で

はちょっと違うかもしれない。

西平 選挙の予想で、初めに何党に入れるか。レーガンに入れるかカーターに入れるか、そういうことは平気ですか。それは遠慮する部分に入りませんか。やっぱり人によりますか。

パッシン 人によって遠慮するでしょうね。本当のこといわないで遠慮する、あるいは意見を保留することもあるでしょう。みんなそうじゃないかもしれないけれども、ある一部がそういうふうにやる。そしてどの一部がやっているかわからないから、問題がある。

西平 いま日本で世論調査で行った場合に、「もう世論調査は多くて間に合ってます」といわれたという笑い話があるんですけども、(笑) どうでしょうか、世論調査に対する協力というか、そういう点でアメリカ人もうるさがりですか。

パッシン 大体うるさがりないでしょう。だけど、うるさがる場所もあります、何%かはわからないけど。たとえば、非常に厳しいストラティファイド・ランダム・サンプリングの場合、指定した人でなければダメだという場合、答えてくれないと困るんですね。

西平 それこそアパートまで行っても、なかなか中に入れないということもありますか。

パッシン むずかしいですね。ですから、このごろアメリカで電話でするか、あるいは行く前に電話でアポイントメントすることもあります。それはしょっちゅうあります。

このごろ幾つかの研究所が、即座に、早い調査をやろ

うと思えば、電話でやる。多少の欠点があるかもしれないが早いです。そのかわりに欠点があるということも、ちゃんと認めながらやるんです。

ぼくが見たところでは悪くないと思った。なかなかうまくできるなと思った。けれども、日本でもそうでしょう。世論調査ばかりでなく、マーケット・リサーチが多いですから、そこはかなりの抵抗が出てきています。マーケット・サーベイに対して怒り出すことがあります。「自分のプライバシーが侵されている」とか。電話でやるのが非常に多いんですが、そこは反発が出る。

西平 そうすると、一般のアメリカ国民だったら、たとえばギャロップとかハリスというような非常に有名なところならば、わりあい抵抗なく受けるわけですか。

パッシン わりと……。問題にもよりますけれども、政治意識ならみんななれているし、すぐ読み物にしますから、そういうことについては一応協力するだろうと思います。

ご存じのとおり、アメリカで少数民族がかなりいますから、ああいうところであまり喜ばないことがあるでしょうね。この間の国勢調査で、そういうケースかなりあった。それによって、多少のアンダー・エスティメート、つまり低い見積もりが出ていた。大変問題になったんです。裁判事件までなっています。ニューヨーク市とか大都会で大分問題になっています。協力しない人が多かったということで、あるところは国勢調査をやり直すことになっているのです。

それはほとんどラテンアメリカ系か移民系か、あるいはモグリで入国した者ですね。そして黒人の中にもかな

りありました。そういう少数民族とかモグリには、非協力者がかなり多いのです。

それは、普通の世論調査でどういうふうにするのかという問題もあります。たとえば政治意識とか選挙調査になりますと、投票するかどうかという問題がありますから、有権者であるかどうか。日本は有権者名簿がありますけれども、アメリカはそう簡単でないし、場所によって基準が違いますから、本人が知らない場合もあって、ちょっとむずかしいですね。

西平 日本では世論調査だけでなく、国勢調査みたいなああいう調査も、だんだん必要の要求度が高まるけれども、実施するのはなかなかむずかしい。

パッシン 日本では統計局がいろいろな調査をやるでしょう。消費動向調査とか、幾つくらいあるのですかね、8つくらいですか。

西平 いや、もっとたくさんあります。

パッシン 定期的にやるやつね。パネル式で……。

西平 パネルでやるのもありますし……。

パッシン どうですか、パネルは。ちょっと抵抗が出ない？

西平 やっぱりだんだんむずかしくなってきていますね。

清水 ちょっと話がさかのぼりますけれども、パッシンさんがCIEで軍籍を離れて民間人になられたのは、何年何月ですか。

パッシン ぼくが復員したのは1947年の4月です。終戦のときは、日本語を勉強した者はみんな1年から1年半くらい復員が延ばされた。ぼくはあれにひっかかりまし

て、47年の4月だったと思います。復員後はさっき話したようにガラッと変わりました、少将待遇になったんです。(笑)

東京以外にあまり世論調査機関がなかったですね。京都の永末さん。永末世論調査研究所というのがあったでしょう。当時からのつき合いです。

西平 代議士になっちゃいましたからね。(笑)

パッシン でも、変な調査機関があった。博多にもかなりありました。徳島にもあったことを覚えているし、とにかくあちこちにありました。当時はインチキなものが多かったですからね。

われわれ一番最初パネルをやったのがおもしろかった。朝鮮戦争が始まったころでしたが、もう1人PO&SRにいた人、覚えているでしょう、セーヤー君。セーヤー君が、イギリスで何か有名な広告会社の調査部長をやっているんです。PO&SRをやめて国務省に行って、外交官生活を送った後、アメリカの一番大きい広告会社で世論調査をやることになりました。

彼がそのパネル調査をやりました。ぼくがいつもやりたかったけど、日本の調査機関は高いからやりたくなかった。そして、どこと一緒にやったか覚えてないけれど、とにかく朝鮮戦争のときにそのチャンスがあったんです。そのちょっと前に、わりと数を限った調査をやりまして、どういう理由か、そのまま持っていたんです。朝鮮戦争が勃発したときにそれを利用して、同じレスポネンツ500~600人に似ている質問を聞いたんです。3カ月たってから、もう1回やった。同じ人は3回しか使えないですからね。非常におもしろい調査だった。

たとえば、「何党を支持するか」と聞いたら、1回目と3回目、総計ほとんど変わらなかった。変わらなかったといっても、中身を見たらずい分違っていましたが、総計は同じだった。ですから、2つのまるきり矛盾した解釈ができた。1つは、「政治が非常に安定している。全然変わらない。だけれども、中身が何回も変わったことを見たら、「ちっとも安定していない」という解釈もできた。すごくおもしろかった。

だから、ぼくはいつも調査機関にパネル調査を推薦したんだけど、やるところがほとんどなかった。

西平 ぼくたちが半年の間を置いて支持政党のことをやって、同じ答えをする人は7割くらいですね。

パッシン 当時は朝鮮戦争だったから、わりと激しく変わる時代にしても、不思議なことに、統計が全く同じだった。本当に目が覚めた。驚いたです。けれども、ぼくは説得力が足りなかったらしいから、だれも納得させられなかった。(笑)

それをセーヤー君に担当させたんですが、アメリカのパブリック・オピニオンという雑誌に発表したと思います。

西平 それじゃ、どうも長時間ありがとうございました。